

太神宮 あちこち

第5回

大間国生神社

神宮権禰宜 石垣仁久

伊勢市常磐一丁目の住宅街の中、草奈伎神社と同じ敷地に、豊受大神宮撰社の大間国生神社が鎮座しています。

撰社とは、旧官国幣社(かつて国が管理した官幣社と国幣社合わせて二〇八の神社)の基準では、本社に祀られる主祭神の后・御子・臣下など関係深い神を祀る神社で、それ以外は末社とされました。神宮は官国幣社と基準を異にしており、撰社は平安初期に編纂された『延喜式』巻九・十の「神名帳」に記載がある官社で、末社は神名帳に未載ながら、同時期の『儀式帳』に見える神社です。

社名の太間は地名と考えられ、『山田物絵図』(寛文年間)を見ると、当社前の道が大間広と記されています。大間は広い土地の意味で、広は更にそれを誇張したものでしょう。国生は、土地の開拓に関わる神名と考えられます。月夜見宮境内の高河原神社を

『神名秘書』(鎌倉時代後期)は「一名川原坐国生神」と記

していますので、河川が土地を削り、また氾濫により土砂が堆積して土地が生じた様子を、国が生まれた状態に見立て、そこに神の働きを感じた名称と思われます。内宮の撰社狭田国生神社、坂手国生神社も、これと同じ意味でしょう。

さて、当社の玉垣の中を拝見しますと社殿が二つあります。平安初期に書かれた『儀式帳』にも「正殿二区」とありますので、古くから二殿で一つの神社であったことが判ります。

前出『神名秘書』で度会行忠は、祭神を大若子命と弟若子命と記しています。この二柱の神は、外宮祠官の度会氏が祖神と仰ぐ神で、共に天牟羅雲命の子孫で、大若子命が兄で、弟若子命が弟です。(乙若子命とも書きます)更に度会家行は『類聚神

祇本源』(南北朝時代)に「東大間、西国生」と、二つの社の東側を大間、西を国生であると断定した「社記」を引用しています。

『倭姫命世記』によると、皇大神宮御鎮座の際、大幡主命が国造と大神主を兼任したとあります。大幡主命とは大若子命の一名で、天皇から節刀を賜り、越国(北陸地方)の凶賊阿彦を討伐した後、大幡主の名を賜りました(『豊受大神宮禰宜補任次第』)。

節刀は標劔仗といわれ、劔に宿る神霊を祀ったのが草奈伎神社です(第四回「草奈伎神社」参照)。このように、草奈伎神社と大間国生神社が一つの敷地にあるのは所以があつてのことなのです。

一方、江戸後期の内宮祠官蘭田守良は『神宮典略』で、当社の祭神を度会氏の祖神とするのはとんでもない偽りであると糾弾しています。守良神主は、度会氏は祖神を尊くするため、「この神社は祖神のなにかし」、「この神社は禰宜の祖」など乱雑に言っているが、朝廷が幣帛を奉られる神社に度会氏の祖神が祀られているはずはなく、その点は内宮の撰社の祭神と比べてみればわかることであると、度会氏祖神奉斎説を全面的に否定しています。

確かに守良神主の主張には一理ありますが、国造兼大神主であつた大幡主命を祖神として外宮の祠官を任じた度会氏の伝承にも歴史の重さがあります。

(了)

会員募集中

伊勢法人会女性部会員を募集しています。
女性部会へ参加して税の知識を深めて、
色んな場面に役立てましょう。
詳しくは、事務局までお問合せ下さい。



お伊勢さん菓子博2017

平成29年4月21日(金)～5月14日(日)

第27回全国菓子大博覧会・三重が、三重県営サンアリーナ及びその周辺で開催されました。暑い中、お手伝いに参加された皆様ご苦労さまでした。

